ことばの意味とところ

井深 大/石井 勲 対談 漢字は「右脳教育」

焦らずに「待つ」こと

井深 私、大体、子供を「漢字族」と「テレビ族」の二つに分けて考えられると思うんです。漢字族というのは、小さい時に漢字に一度興味を持ちちゃうと、自分で本を読んで字を覚えて、自分でどんどん自分の道を開拓していく。テレビ族というのは、テレビからいろんな情報を上手に受けとめるけれども、自分自身を発表する力、何かを表現してレポートを出すと言った、そういう力に非常に欠けているという感じ。

石井 それはおもしろい分け方だと思いますね。確かにそういうことを感じます。漢字教育をやっている幼稚園の親たちの声を聞きますと、卒園した後も、小学校へ行って、あるいは中学校へ行って、非常に読書が好きだと言いますね。「うちの子は漫画は読まない」と。

井深 それから、漢字族、だんだん高級なものを自分で求めていく傾向がみられる。

石井 論語をやっている幼稚園での話ですが、親が電車に乗りましてね、お隣の奥さんと盛んにぺちやくちやお話をしていた。すると、子供が親の袖を引っ張りまして、「車にのぼりては正しく垂すいを取りて立つ。車中には内顧せず、疾言せず」とこう言ったんです（笑い）。親は何を言ってるかちっともわからない。

井深 車に、何ですって？

石井 「車にのぼりては正しく垂を取りて立つ」——まあ今で言えば、吊り革ですね。これを持って立つ。これ孔子の論語にあるんです。「車中には内顧せず」、きよろぎよろしないんですね。それから「疾言せず」早口でおしゃべりをしない。車に乗った時の心得です。孔子が通勤のとき車に乗るんです。馬が引いたんですね。孔子は魯の襄公に仕えたわけですけども、襄公からお呼びがありますと、車を命じてすぐにうちを出た。吊り革

をしっかり持って……。座ってないんですね。

子供が「これこれこうだ」と説明したんですね。母親が感心して、「子供に教わって、親も賢くなった」と言って、園長にお礼に来たということです（笑い）。

井深 なるほどね。私の考えじゃ、もう論語なんて言うのは早くやった方がいいですね。論語読みの論語知らずでも構わないんですね。

石井 そうなんです。そうなんです。それでいいんです。

井深 私は、漢字があるために、日本人には思想的なものがかえって失われてしまうのではないかという考え方をずっと持ってきたんですが、このごろちょっとまた逆になりましてね。漢字ってのはどっちかというところと右脳なんです。……。

石井 いや、両方らしいですよ。

井深 しかし、世界中の文字で右脳に属するのは漢字だけじゃないだろうか。もちろん、

左の、右の、ってそんなにきれいに分かれるわけではないんだけど、少なくともパターン、図形としてぱっと受けとめられるのは漢字だけなんです。右脳の教育のためには音楽をやらなきゃいけない、美術に接しなきゃいけない、信仰とかそういうものにも接しなきゃいかんけれども、漢字がここに新しく登場してくるべきじゃないかと。

このごろ私、痛感しているのは、ただ丸暗記しなきゃならぬものと、理解して覚えなきゃならないものってのをいまの教育はごっちゃにしているんですね。棒暗記、丸暗記しなきゃならないものは、厳然として存在しているわけなんですけどね。たとえば、九九なんてのは、三×三だから「三三が九」じゃなしに、「三三が九」というときには、もう何でもいからそれで覚えなきゃいけない、そういう性格のものなんです。一番いい形は「三三が九」を覚えて、それからあと自分で初めて「ああ、三三が九っていうのはこういう意味だったか」と悟ることが一番必要だと思うんです。

石井 自分で悟る。この悟るということを持つことが、私、教育では非常に大事だと思うんです。

井深 待つ。あせらないでね。

石井 ところが今、親でも教師でも、あせって教えるわけですが、何でも、漢字ってものは、あせって教えてはいけない、例えば、鶴を経験したときに鶴という字を教えるときすぐ覚えるんです。鶴を見もしないで、経験のないものを字ばかりあせって教えるわけですが。

井深 その点、私は先生とちょっと違うところがあるんですけどね、覚えるときは、鶴が何だろうと構わず、何でも機械的に覚えちゃうという……。

石井 それはそうです。ただ待つということは、なるべく経験の場を待って教えること。それで鶴や鳩がわかって、子供は必ずその中から「鳥」という字を発見する。その発見するのを待つんです。「前に習った鶴と今度習った鳩の字には同じところがあるでしょう」

と教えるのは待ってほしいと……。

井深 それは重要なことです。今度は「虫がつくものにはどういうものがあるだろう」とかって、それは自己開発なんですネ。

石井 そう、そう。そこなんです。そこをさきに教えてしまうと……。

井深 「これは虫だから虫がつくんだよ」という表現はいけない。

石井 そのところを子供に発見させるまで待つということですね、これ、私、いまの教育で一番必要なことだと思っんです。

「悪魔」という字を考えた

井深 それともう一つ、生理的に、パターンを受けとめるのに非常にいいとき……そう

いうものを受けとめられなくなる年齢が必ずあると思っんです。

石井 それ、小学校の二年から三年だと思っいます。

井深 ああ、そうですね。

石井 小学校の二年生ぐらいまでは、幼児と同じパターンでさっで行くんです。ところが、もう三年生になりますと……。

井深 理屈で覚えなきゃならなくなるんですよね。そこが全然違ってくると思っんですね。

石井 一番高いところは、二、三歳です。二、三歳が頂点。それから後はもう下がる一方でですね。小学校の三年生ぐらいになると、もうどうしようもなくなってくる。

井深 ただその漢字というものを非常におもしろいと思わせる、どうしたら面白く思っうかということ……。

石井 それはいまいったように、共通しているところを発見させることですね。どこが同じでどこが違うかという、そういう見方をして、そして、それを発見したときに「ああ、いいところを見つけたね、これは虫という字なんだよ」と、そして「虫というのはね、蜂はちや蝶ちょうの仲間のことを言うんだよ」。もう目を輝かせて聞くんですね。

井深 海外に駐在する人の子供たちの一番大事な問題は、後になって追いつけない漢字だと思ふ。これも非常に強く言ってるんだけど、どうしてもみんなピンとこないんですね。数学だろうが、言葉だろうが、何でも追いつけるんだけど、漢字を使う能力については、もう小学校六年になったら、何と言ってもツレーイトなんです。むしろ生理的、物理的問題だよ。頭脳とか、何とかって問題じゃないんですね。だから海外へ行く人こそ、小学校へ入る前に、漢字に興味を持たしちゃうことですね。英語なんて向こうにいりゃあ勝手に入ってますからね、漢字だけは接する機会がないだけに、縁遠いものになっちゃうんです。

石井 そうです。もう本当にそうです。ことに常用漢字にないような鳩とか、鶴というものから小学校でならう鳥という字を子供に発見させて、発見の喜びを味わわせる。私はね、この発見の喜びというものを親や教師がみんな奪ってしまって、それが自分でものごとを切り開いていくという、そういう意欲を喪失させているんじゃないかと見ております。実は、私の幼稚園でこういうことがありました。ある先生が、悪魔という字を黒板に書きました、そして「だれかこれを読める子？」って聞いたたら、誰も読める子がいない。「あ、読めないなら、教えてあげましょうね」と言ったら、「先生、待ってください。自分たちで考えるんだから」。先生はびっくりしてしまったわけです。読めない字をいくら考えてって読めるようになるはずがない、ところが読んじやったんです。どうしてだと思えますか？ 悪魔の魔という字に鬼という字がある。それを子供はちゃんと発見して「あの字に

井深 大/石井 勲 漢字は「右脳教育」

は下の方に鬼という字がある、だからあれは鬼の仲間だ」。そしたらある子が「あれは上の字を、確か新聞でこの間見て、わからないからお父さんに聞いて覚えてる。それは凶悪犯人という言葉だった」と。それで、凶悪のどっちかだというわけですね。そしたら、「悪だ。それじゃあ、あくまに違いない」と(笑い)。

井深 ふーん、漢字族というのは、そういう傾向を持つんだね。サイエンティフィックとはそういう意味ですね。

石井 そうなんです。科学的というのは、そういう科学的思考なんですよ。で、これは幼稚園のうちにやらないとダメです。

ピ・ン・ク・い

石井 ときに、私の孫が三歳のときに「おじいちゃん、この花、ピンクい色してるね」といったんです。

井深 ピンクい？

石井 そう、ピ・ン・ク・い って言うんですよ。私も、ピ・ン・ク・い って言葉はそのとき初めて聞きましたから。

井深 形容詞ですか。

石井 形容詞ですからね。ですから、たいした言葉を発明して子供に教えるものだなあと、嫁に言いましたら、「いえ、私はこんな言葉を一度も使ったことはありません。うちの子はそういうことを言うけど、あれは自分で言い出したんです」 って……。

井深 自分で言い出した？

石井 それで私、考えてみたんです。たとえば、動詞の活用で未然形を使うべきところは、ちゃんと未然形を使うでしょう、もう三歳から四歳になると。連用形を使うべきところはちゃんと連用形を使う。これは文法を教わっているわけじゃないんですよ。それで言葉として習っているから、頭にあるから使うんじゃないんですよ。ちゃんと法則を自分でこしらえ、こしらえた法則を使ってやっているわけです。だから、白、白い、赤、赤い、ピンク、ピンクい……と、こうくるわけです。動詞なんかまったく、行かない、泣かない、書かない、というふうには、一つがわかるといって、ちゃんと応用がきく。ピンクといえは、外国語だから大人ならそこで全然動かないわけです。ところが子供は……。

井深 そこはピンクってというのは、日本語であるか英語であるか、そんな差別はないわけですね、子供には。

石井 ええ、同じ、白、赤、ピンクと、こう言っているわけですからね。ですから、子供というのはそういう、法則化し、それを適用するという能力を持っている。だからそのときに、そういうものを入れてやらなきゃ、法則化しようにも材料がなかったら法則化できないでしょう。私は、それが人間の頭の栄養だと思うんです。つまり、胃をからっぽにしていりや、誰だっけ力が出たこない、頭をからっぽにしているから目に光も出てこないわけですよ。

井深 本当に眼の光が違うね。

石井 精薄児でも漢字教育をしますと、目が輝いてくるんですよ。だから、あれは明らかに頭の栄養失調ですよ。精薄児には、かな文字を教えたって頭に入らないんです。

井深 それは重大問題ですね。漢字だったら入るんですか。

石井 漢字だったら入るんです。かなは、毎日毎日、一年間かかって教えても覚ええない

んです。ところが漢字は簡単に覚えている。そして面白いのは、言葉以上に漢字のほうが早く頭に入るんです。重度の精薄児になりますと、言葉が覚えられない。これは花だよと言っても「はな」と口からは出てこない。ところが「花」という漢字は覚えていて。「はな」と「花」がちゃんと結びつく。それから、まだ言葉の言えないような赤ちゃんに毎日、目という字を見せて、目を示す。そうすると、目とか、耳とか、鼻とか、口がきけないうちに。目という漢字を見せると目を指さす、耳という漢字を見せると耳を指さす、鼻という漢字だと鼻を指すんです。漢字を出すとかわかっていうことですね。発音は出来な。い。ですから、確かに言葉を覚えるよりは、漢字と物とを結びつける方が早いですね。ハカ月あたりから可能ですね。

井深 それはおもしろいですね。

五丈原の詩をうたおう

井深 先生、幼稚園論語習得運動をやらかしましょうや。具体的な目に見えるものというのはいずれ目に見えるんですよ。ところが抽象的なモラルであるとか、信仰であるとか、そういう抽象的なものこそそういう時代に身につけなきゃならないんですけれども、字として自分が論語の中の文句を知っているということが、後になってそういうものを身につけるのに非常に力強い力になると思うんです。先ず、形とかそういうもので身につけておいて、抽象論というのは後からでもいいんだけど、漢字には二つの意味があって、そういう抽象的なものを何かしらんがそこ含んでるんだけどね、含ませないと教えられないということ打破したいんですね。形として身につけて、しかもそれが抽象的な意味を持っているんだということが後になってわかるし、それがその人にとって大切な

ものになる……ちよって表現がまずいけど。

石井 はあ。つまり入れとかないと芽生えてこないんですよ。論語を、今、大体二十歳前後で初めてやるわけですね、高等学校から大学あたりで論語をやる。理屈がわかってきてから。

井深 左脳で解釈せざるを得なくなっちゃうわけなんだよね。

石井 ですから、本当の論語がわからないということですよ。そういうときに論語を学ばせてもかえってよくない。どうせ論語が本当にわかってくるのは三十、四十、恐らく四十を過ぎてからです。

井深 そういう時代までそういうものを読まないでおくというのは、何も親しみが出てこないしね。だから、幼稚園論語発生論というのは、非常に重要なことですよ。

石井 山本七平さんもそれを言っているんです。結局、そんな時期にやらないで、むしろ

意味もなにもわからない時代に頭の中に入れておけば、それが今度身につくと……。

井深 本当に自分のものになる。そこらへんが今までの教育というのは、絶対に意味がわからなくて教えておこうということは、日本の教育には一つもないですね。

石井 これは星落秋風五丈原、土井晩翠の有名な……。このところなんかいいでしょう。(二人で、声を合わせて朗読する。以下五丈原の詩文)

祁山悲秋の風更けて

陣雲暗し五丈原、

零露の文は繁くして

草枯れ馬は肥ゆれども

蜀軍の旗光なく

鼓角の音も今静か。

丞相病あつかりき。

末は黄河の水濁る

三代の源遠くして

伊周の跡は今いずこ、

道は衰へ文弊れ

管仲去りて九百年

樂毅滅びて四百年

誰か王者の治を思ふ。

丞相病あつかりき。

これをすぐ覚えてしまうんです。この一冊、幼児は完全に覚えてしまいます。私ね、漢字というような言葉だけにしてしまいましたけれども、子供がこういう文章というものに喜ぶことに気が付いたんです。

井深 だから、詩を大切にしないきゃいけないんだね。これは幼稚園ですか。

石井 そうです。みんな幼稚園です。テープで。

井深 これは、ひよっとしたら一茶の俳句の暗唱よりも意味が大きいかもね。意味の分からないことを教えるというのが本当なんですよ。全部言葉でわかって納得するってことは、もう前時代的なことで、言葉であらわせないものをわれわれはつかんでいかなきゃならない時代に入ってきてると思うんです。つまり右脳ですよ、これは、絵をつけたり、ひとつひとつの漢字だけを発音して教える、というのはやっぱり、大人の知識からでているんでね。だから、この「五丈原」をやるというのはおもしろいな。ことに、幼児がそれ

を喜ぶとは……。

石井 喜ぶんですよ。喜ぶのは漢字ばかりのところなんですよ。

井深 かなまじりの方が、われわれには読みやすくていいけど(笑い)。

子供は楽しんで覚える

石井 子供は不思議に漢字ばかりのものを喜ぶんですね。一番喜ぶのは秋風五丈原。それから「大学」もやってみたんです。松下政経塾の塾生に講義しているんですが、それと同じ教科書を使ってやっただんです(笑い)。

井深 幼稚園と?(笑い)。

石井 政経塾は、やっぱり東大、慶応、早稲田というのが一番 多いわけですよ。み

んな秀才ぞろいですよ。ですが、「大学」なんか私が読んで、講義して、次に読ませてみると、結構引っかけますね。スラスラって読むのは少ないですよ。

井深 それは字が読めるだけにね。

石井 ええ。ところが、幼稚園の子供というのは、スラスラって読みますからね、つかえずに。

井深 おもしろいなあ。

石井 だから、覚えられるときにうんと入れとけば、頭は別に使いませんからね。子供は楽しんで覚えるわけですから。

井深 どこがおもしろいんだろうね。

石井 それを私、考えたんですが、それが本能だと思っただけです。幼児というのはみんなそういう具合に生まれついてきていると思っただけです。ところがそういうものを何も与え

ないから……。頭が栄養として欲しがっているわけですよ。

井深 だからね。脳細胞というのは数パーセントしか使われていないわけですよ。まだまだ入れなきゃならない問題がいっぱいあるのを……。

石井 こんなものは、こんなものは大変だろうというんで、みんな控えちゃう。

井深 とにかく、子供にそんな難しいことはということがね。

石井 これが一番、今の教育の困った点ですね。

井深 だから暗記なんていうのは、いくら脳を使ったって、キャパシティは大丈夫なんだから、あらゆるものを棒暗記させときゃいいんだけどね。

もっと詩を大切にしよう

石井 本当に今の教育のいけないのは、一番大事なそういう国語教育です。昔のような名文がないのです。だから、暗唱することができないんです。暗記にたえないわけです、子供が。

井深 暗記ということは早くやらなきゃいかんということですよね。

石井 われわれのころは、いまだに頭の中に残っているものがあるでしょう。いい調子だね。それがありませんよ、いまは。そして、ことに文語調なんてのは非常に調子がいいでしょう、ところが文語なんてのは難しいというので全くない。

井深 漢字かなまじりになったというのは非常に進歩ですね。それからね、私は書類でも何でも、かなまじり漢字で、行を遠慮会釈もなく変えるという文章の、左横書きっての

が、世界で一番いい表現方法だと思っんです。これは、パツと見て大体がわかるというものもあるし、丁寧に読んでいけば、その意味ってものも正確なつかまえ方ができるしという、そういう意味で、たとえば、一番悪い例を出しますとね、ローマ字のテレックスです。あれは全部読まなきゃ意味が全然わからないんですよ。その対照的なのが、かなまじりの漢字文というやつが最高のものなんだろうと。漢字だけでもだめなんです。

石井 中国がうまくいかないのはそれなんです。漢字ばかりだと読みにくいですよ。漢字とかながうまい具合にまじっているのが読みやすい。

井深 それから読みようがいろいろできるわけなんです、そのためにね。

漢字かなまじり文は世界一

石井 有名なアダム・チョムスキーという言語学者がいるんですよ。これはマサチューセッツ工科大学の教授で、世界的に二十年ほど前から有名な人なんです。二十年ほど前に日本へ来ました時に、自分は日本語を詳しく知らないから自信を持つては言えないけれども、漢字かなまじり文というのは世界で一番表記法として有効なんじゃないかと……。

井深 かなまじりの漢字として、書くのは絶対に縦なんです。読むのは、私は、左横書きだと思っね。それは慣れもありますよ。

石井 私は縦の方がいいと思っ。なぜ縦の方がいいかというと、左右で一つ見るわけでしょう。そのまま見た形で、こう下がっていくのが私はいんじやないかと思っ。横にすると、この関係で、二つこういう関係が横に動いていくよりは、何かこうきた関係が、横

井深 大/石井 勲 漢字は「右脳教育」

から左右でとらえたものが、そのまま下がっていくのがいいんじゃないかと……。

いま、台湾との教育の交流をしているのですが、向こうの研究発表に、「一目読み」つてのがあるんです。本をぱっと見て、一ページを全部を読んでしまう。そういう教育法をやってるんです。これ初めはだんだん増やしていくわけです。一行をぱっと見て、それを今度二行にし、三行に増やしていく、そうするとできるんだそうですよ。

井深 だから、イランとか、サウジとかでコーランだのお経を、詩人が、浪花節なにわぶしみたい
にみんな集めて、音吐朗朗とやるということが、どれだけしみ込んで、その人たちに影響
を及ぼしているか、そういう意味合いというものをもうちょっとわれわれは考えなきゃい
かんかもしれない。日本の教育では詩というものを何もとらえていないでしょう。ほとん
ど。だからもっと詩を大切にしなければ、本当の教育はできないんだと。

石井 子供の作った、詩でないような詩があるが、これは詩とは言えないんです。子供
らしい発想はそこにある。だけど詩というのは、やっぱり、韻律を持っているということ
が大切ですよ。

(幼児開発一九八四年一〇月号に掲載)